

(6) コンピューター断層撮影 (CT) の応用

CTに関する研究発表は6題あり、いずれもWest症候群、Lennox - Gastaut症候群がその主な研究対象であった。種々の興味深い知見の中で、特筆するに値するのは、ACTH療法により極めて急速に、かつ著明に、頭蓋内脳実質外空間の拡大を来すことである。

この現象の本態に関しては、まだ全く不明であり、今後の研究に待つしかないが、多分脳実質の水分量の減少が反映されているのではなからうか。

(7) West症候群、Lennox - Gastaut症候群に対するACTH療法の再評価

大田原 (昭53), 渡辺 (昭53), 島田 (昭51) によって再評価が行なわれた。

(8) 抗てんかん剤の副作用の検討

種々の観点から、副作用がチェックされた。すなわち免疫グロブリン、免疫機能 (渡辺, 昭51, 昭52), 抗核抗体 (福山, 昭53), クル病との関連で血清25-hydroxy-vitaminD (隅, 昭51), 血清アルカリフォスファターゼ活性 (飯沼, 昭53), 血清 γ -GTP (坂本, 昭52), 各種肝機能 (鈴木, 昭51), 実験ラットにおける小脳細胞移動・成熟障害 (島田, 昭52) など、多岐に亘って熱心な研究が行われた。

(9) 治療と予後

てんかん患児に伴なう行動異常、およびMBDの徴候について、木村 (昭51, 昭52, 昭53) は、総合的アプローチの必要なことを強調した。

小児てんかんの長期予後についても研究が行なわれ、想像以上によい経過を辿っていることが、北条 (昭51), 松尾 (昭51), 隅 (昭52) によって夫々報告された。また定型欠神 (関, 昭53), 小発作群 (関, 昭51), West症候群 (渡辺, 昭53) の長期予後も検討された。

最後に、大田原 (昭52) は、経過順調なてんかん児において断薬するに当たっての規準としては、臨床発作消失期間より、脳波正常が2年続いたことが、より信頼できることを示した。この問題は、なお多くの追試が必要と思われる。

結 語

本研究班は、研究協力者の全面的協力によって、かなりの実績をあげることができた。しかし、小児けいれん性疾患の問題は、広汎かつ膨大であって、これからなすべきことが山積している。今後更に大きな努力を積み重ねてゆく必要を痛感する。

1. 抗てんかん剤 (とくに ethosuximide) と抗核抗体

分担研究者 福山 幸夫

協同研究者 大杉 芳美 ・ 丸山 博

(東京女子医科大学小児科学教室)

研究目的: 抗てんかん剤、— ethosuximide (以下ESMと略す) 単独内服例及び他の抗痙攣剤との併用内服例における抗核抗体陽性率の検索を目的として、以下の調査を施行した。

対 象 : 東京女子医大小児科および松戸クリニックにおいてESMを、単独または他剤と併用で

投与されている。男児69名、女児102名、計171名のうち、抗核抗体を検査しえた男児8名、女児30名、計38名である。

研究方法：抗核抗体は、東京女子医大では鶏の赤血球を用いた間接蛍光抗体法、松戸クリニックではマウスの肝細胞を用いた間接蛍光抗体法を用い、DNAテストは両施設共に富士臓器製DNAテストを用いた。

研究結果：2回以上検査を反復施行した症例では、一度でも陽性を示した場合陽性例とした。抗核抗体陽性率は、東京女子医大では、男児0/4(0%)、女児3/18(16.7%)、計3/22(13.6%)、松戸クリニックでは、男児1/4(25.0%)、女児7/12(58.3%)、計8/16(50.0%)であった。

抗核抗体と抗DNA抗体を同時に測定した症例は、東京女子医大では22例、松戸クリニックでは2例であったが、このうち東京女子医大の症例では3例が抗核抗体陽性を示し、そのうち2例に抗DNA抗体を認めた。松戸クリニックの症例では2例共に抗核抗体陽性であり、このうち1例に抗DNA抗体を認めた。

抗核抗体陽性例において抗体価をみると、無症候例は東京女子医大の3例、松戸クリニックの7例であり、抗体価は全例が160倍以下であった。SLE発症例は松戸クリニックの1例であり、抗体価は640倍以上であった。

次に、抗核抗体陽性群と陰性群につき、検査時年齢、ESM内服時間、ESM内服量及び血中濃度、他の血清免疫学的検査及び末梢血液検査、併用薬剤数、併用薬剤の種類につき検討した。検査年齢、ESM内服期間、ESM内服量及び血中濃度については、両群間で明らかな差異は認められなかった。他の血清免疫学的検査及び末梢血液検査では、検査の不備があるが、有意差はないように思われた。併用薬剤数別にみると、併用薬剤数の多い例に抗核抗体陽性例が多い傾向が認められた。併用薬剤の種類別にみると、ESM単独内服例は1例のみであるが、抗核抗体は陰性であった。抗核抗体陽性例は全例がバルビツール酸誘導体との併用例であった。

考案：薬剤誘発SLEの誘発薬剤の一つとして抗てんかん剤があることは良く知られているが、そのうちでもphenytoin、ESM、trimethadioneが最も有名である。

今回は、ESM内服者における抗核抗体陽性率を調査したが、陽性率は検査を施行した両施設間で明らかな差異を認め、松戸クリニックの症例では内服者の50%、東京女子医大の例では13.6%であった。諸家の報告では約20%前後という報告が多い。この陽性率の差異が検査方法の差異のみによるものか、又はアレルギー素因等の対象症例の個体差に基づくものか、今後の検討を必要とする。

今回の調査では、ESM内服中にSLEを発症した症例は1/171(0.58%)であり、その例の抗体価は、無症候例のそれに比べ明らかに高値であった。

無症候性の抗核抗体陽性例をどう扱うべきかが実際上の問題になる。Singsenらは、抗核抗体陽性例について、同量継続内服にて10ヶ月間経過を観察した結果、その後発症した例は1例もなかったことより、抗核抗体陽性という結果をみて、直ちに服用を中止する必要はないと述べている。抗てんかん剤に関しては、この種の研究はまだSingsenらの報告のみであり、この点に関しても今後検討していく事が必要と思われた。

今回の抗核抗体陽性例は、全例がバルビツール酸誘導体との併用例であった。フェノバルビールによるSLE発症例の報告はまだないが、無症候性抗核抗体陽性例は約20%に認めたとの報告があり、また、プリミドンはSLE誘発薬剤として知られている。本研究における抗核抗体陽性は、ESMにより生じたのか、他の薬剤の影響かは不明であり、この点についても今後、研究をすすめる予定である。

結語：ESMを単独、又は他の抗てんかん剤と併用で内服中の38例について、抗核抗体陽性率を調べたところ、東京女子医大例では、13.6%、松戸クリニック例では50.0%であった。検査時年齢、ESM内服期間、ESM内服量、他の血清免疫学的検査及び末梢血液検査所見を、抗核抗体陽性例と同陰性例とて比較したが、両群間に明らかな差異は認められなかった。併用薬剤数については、多剤併用例に陽性例が多い傾向が認められた。併用薬剤の種類別にみると、陽性例は全例がバルビツール酸誘導体との併用例であった。

2. Lennox 症候群に対する ACTH の効果について

研究協力者 大田原 俊輔

協同研究者 山磨 康子

(岡山大学医学部小児科)

目的：Lennox 症候群はWest 症候群と共に悪性の年齢依存性てんかん性脳症で、小児期の難治てんかんの代表と見做されており、最近の抗てんかん剤の進歩にも拘らず、発作の抑制は極めて困難である。しかも、これらは発作の存続により進行性知能荒廃を来すことから、早期治療の必要性が強調されている。

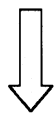
ACTH療法がWest 症候群に有効なことは周知である。Lennox 症候群はWest 症候群との相互移行の点等から近縁の病態生理を持つと考えられており、ACTHの有効性が推測されるにも拘らず、系統的検討が加えられぬまま、一過性効果しかないものと軽視されてきた。そこで、Lennox 症候群に対するACTH療法の意義を明確にすべく、長期間の追跡的研究を含め、臨床的脳波学的にその治療効果およびそれに影響する諸因子を検討した。

研究対象および方法：研究対象は1960～1977年に岡山大学小児科においてACTH療法を実施し、6カ月以上経過を追跡しえたLennox 症候群40例である。ACTH治療時年齢は、最少11カ月、最年長12才1カ月で、追跡期間は6カ月以上、最長18年4カ月であった。

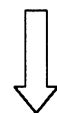
天然ACTH-Z(10～30単位)、又はCortrosyn-Z(0.25～0.75mg)を10～57日間連続注射した。

結果：

1. Lennox 症候群に対するACTHの効果：表に示す如く、ACTHの初期効果として、発作消失は20/40例(50.0%)に達した。16例(40.0%)では発作は減少したが、10日以上消失するには至らなかった。すなわち36例(90.0%)に何らかの効果が認められたが、4例(10.0%)では全く無効であった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的：抗てんかん剤， - ethosuximide（以下 ESM と略す）単独内服例及び他の抗痙攣剤との併用内服例における抗核抗体陽性率の検索を目的として、以下の調査を施行した。